

住信為替ニュース

THE SUMITOMO TRUST & BANKING CO., LTD FX NEWS

第1402号 1997年12月25日(木)

〈 So this is the lastFOR THE YEAR 〉

今日当たりから通勤電車は大分空いてきました。1997年も余すところあと少しです。一年365日。いつの年でも、大きな事件はあります。平穏な年というのはまずない。しかし、今年は日本が戦後経験したことがない事件が多かったという意味では、やはり大きな特色があった年だと言えるでしょう。

「日本が消える」という副見出しがあった元旦の日本経済新聞の記事で年明け。悲観論が蔓延しました。そして春から夏にかけては景気の回復への道筋が見えたようにも思えた時期があった。しかし、その後景気は再び失速状態。年初に比して、ただ単なる悲観論にとどまらない具体的事例を伴った動揺が金融市場を駆けめぐっての幕引き。

鳥瞰するならば、グローバル・スタンダード(Global Standard)が世界を席卷した一年だったと言えるかも知れない。大きなマネーの動く基準が、国や地域のベースを離れて「格付け」とか「世界中の投資家に対する透明性」に移行したし、それに符合しなかった場合には市場から激しくpunishされた。そういう意味では、共通ルールを伴った本当の意味のグローバル・エコノミーの出現の年だったと言える。

日本を含めたアジア各国の動揺は、大部分のアジアの人間には初めて経験する事態でしたし、従って民間も当局も対応が後手後手になった印象が強い。しかし、80年代の半ばから90年代に入ってこれまでに、アメリカやイギリスの金融市場は既に体験したものでした。ですから今年の様々な事件もどこかに「既視感」を伴った。イギリスのビッグバンでは、今日本で起こっていることよりもっと大きな金融地図の変化がありましたし、アメリカの金融界のビッグネームも大きく入れ替わっている。もうなくなった名前も多い。そしてさらに入れ替わりつつある。「変化」、または「変化の加速」そのものは、依然として世界共通の現象です。

今こうした「変化の波」がアジアに押し寄せてきているということです。明らかになったのは、地域や国の伝統的な解決手法では、どうやっても展望が見えなかったことです。韓国は結局IMFの門を叩いた。タイもそう。

日本は、今年8月末現在で政府・民間が保有する米政府債だけで3212億ドル(米政府債発行残高の約9.5%、円貨で約44兆円)を持つ債権国で、他のアジア諸国のようにはなりようもない。しかし、基準のグローバル・スタンダードへの擦り寄りでは他のアジア諸国と同様に試行錯誤の最中にある。

《 more changes ahead 》

1998はどんな年になるでしょう。Who knowsの世界ですが、「もっと大きな変化が起きる」ことだけは間違いない。重要なのは「変化」を見る視点です。今までの世界が当然と考えれば、それからの多少の変化も「大変だ」という事になる。しかし、変化の先行きがある程度読む、読める立場と知識があれば、変化は当然視できるし、さらには変化を楽しむことも可能です。

「大倒産時代」「大失業時代」などなど意味のない見出しが並ぶ年末。しかし、これらは物事の片面しか見ていない。倒れる会社もあれば、創られる会社もある。去るものもあれば、来るものもある。年末のニュースを見ても、実は様々な一概には言えない動きが出ている。昔の日本は消えても、新しい日本は出来つつあると考えます。それを歓迎するかどうかは別にして。

一番重要なのは、「今何が起こっているか」をしっかりと把握する事です。把握なくして、対応はない。誤謬を重ねるだけです。夏に出版した「スピードの経済」(日本経済新聞)は私からの一つの「見方」ですが、誠に事態の変化は目まぐるしかった。98年もそうでしょう。

最後になりましたが、今年一年の皆様のご愛顧に感謝いたしますと同時に、98年が皆様にとって良い一年になりますようにお祈りいたします。

(伊藤)